

キャンパスに共生社会を創る

—留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて—

Creating Inclusive Learning Community:

Developing an Effective Pedagogy for “co-learning” Classes

東北大学高度教養教育・学生支援機構グローバルラーニングセンター 末松 和子

SUEMATSU Kazuko

(Global Learning Center, Institute for Excellence in Higher Education,
Tohoku University)

キーワード：国際共修、異文化間教育、異文化コンピテンシー、課題解決型授業、多文化共生

1. はじめに

近年、グローバル人材育成を教育目標に掲げる高等教育機関で、留学生と日本人学生が共に学ぶ「共修」への関心が高まりつつある。共修は、単に留学生と日本人が机を並べ同じ科目を履修することではない。言語・文化背景の異なる学生同士が知的交流を通して互いを理解し、己を見直し、最終的に新しい価値観の創造を自己成長へとつなげる学習機会である。グローバル人材に求められる資質や能力が、従来の語学の熟達から、傾聴力、情報発信力、交渉力を含むコミュニケーション能力、多様性の受容、論理的思考力、問題解決力、行動力など、より多様化・複雑化し、それに合わせて高等教育における人材育成のあり方にも見直しが迫られている。しかし、予算や教育資源に限られる中、大きな教育改革に着手できずにいる大学は多い。このような状況下で、既に学内に存在する学生という人的資源を有効活用し、グローバル人材に必要な能力を伸ばす教育方法として共修に注目が集まっているのである。

本来であればこのような能力・資質は、留学や海外インターンシップ・ボランティア等の海外研鑽を通して習得することが望ましいであろう。しかし、経済的困難、卒業期の遅れ、就職活動、柔軟性の低いカリキュラムの問題、また語学や異国での生活に対する不安から留学を躊躇する学生は多い。ゆえに海外留学の代替経験として、また留学の啓発および準備教育として、学内で国際的な学習経験が積める共修は貴重な機会となる。留学生が抱える問題としては、日本人学生との交流機会に恵まれず、同国出身者もしくは留学生同士でかたまって行動し、日本語の習得や日本社会・文化に対する理解の深化が図れずにいるケースが挙げられる。日本の多くの高等教育機関では、留学生は未だマイノリティであり、日本語学習クラス、交換留学プログラム、国際学士コース等で学ぶ留学生と日本人学

生が教育場面で交流する機会が限られているのが現状である。留学生にとっても共修クラスは日本人学生との出会いの場であり、日本人学生を通じて日本を理解するインターフェイスにもなる。留学生と現地学生の正課内外での交流が異文化コンピテンシーの向上に影響することはすでにこれまでの諸研究でも明らかになっており (Leask, 2009)、グローバル人材育成において日本人学生と留学生の共修、いわゆる国際共修が生み出す相乗効果は大きい。

2. 国際共修の意義

日本人学生と留学生の共修の効果は、異文化間教育の研究者や実践者の間ですでに十数年前から指摘されている。学生間の異文化間交流の促進を目的に行った教育的介入は、学生の視野の広がりや自己成長への認識を促進すると同時に肯定的な態度変容につながり (加賀美、1999)、また、学習者の協働性、多様性尊重などの多文化理解態度要因に肯定的な影響を与える (加賀美、2006)。多文化クラスで行う協働作業は、学生のコミュニケーション力やチームワークへの意識を向上させ (徳井、1999)、特に課題解決型プロジェクトの企画、遂行を取り入れた授業は、日本人学生の異文化のみならず自文化理解の促進につながる (末松・阿路娜、2008)。留学生にとっても、日本人学生に自文化を理解してもらえよう工夫し伝える作業は、日本的なコミュニケーションスタイル、価値体系また行動様式等のいわゆる文化の理解のみならず、文化と表裏一体の関係にある言語の習得につながる (中野、2006)。このように、さまざまな言語・文化背景の学生を適切な教育介入をもって有機的に結び付けることで、学生らが自分にとって馴染みのない「異」にぶつかり、葛藤し、最終的には理解・受容という過程を経て、自文化との相違点や共通点を探りながら己を見つめ直す機会づくりが可能となる。国際共修は、日本人学生、留学生の双方にとって有益な教育要素を含む一石二鳥教育として今後の発展が期待される。

3. 国際共修の課題

坪井 (1994) は偏差値重視の管理的な受験制度で選抜された日本の大学生が、自分にとって異質な文化や文化摩擦を楽しみ、理解し、そして葛藤を乗り越える強い意欲や意思を有するポテンシャルに乏しい現状を指摘し、敢えて出会いの場を作り一定のお膳立てをしなければ自発的かつ自然発生的な交流は発生しないと警鐘を鳴らしている。しかし、先述したように単に留学生と日本人学生を同じ教室で学ばせることが共修の効果につながるわけではない。日本人学生を対象とした英語のクラスに留学生を、また、留学生の日本語学習のクラスに日本人学生を入れ、双方を単なる会話の練習相手として扱ったり、交換留学生等のために設計された英語による授業を日本人学生の語学力向上の場として利用したりするだけではその教育効果を楽しむことは出来ない。共修の授業では、文化背景の異なる学習者を対象とした入念な授業設計を行い、学習者らが互いを十分理解するための交流活動や討論、つまり意味ある交流 (Meaningful Communication) を効果的に取り入れる必要がある。

共修では授業のテーマ設定、教材選択、指導言語、教育介入の形態や頻度、効果的なグループ学習の導入、課題、評価方法のみならず、学生の授業内の態度や発言に対する留意事項、学生の授業への

自発的参加を奨励する環境づくりなど、学生間の交流を学びにつなげるための「仕掛け」が鍵を握る。しかし、まだ共修の歴史は浅く、教授法が確立されているとは言えないため、共修実践者がそれぞれ試行錯誤を繰り返しながら、職人芸的に教授法を習得し、その経験知も個人の教員もしくは限られた教育実践者間に留まってしまっているのが現状である。

また、そもそも共修化の対象となり易い「日本事情」等の日本語科目や国際学士コースもしくは交換留学生向けの英語科目など、もともと履修対象を留学生として設置された科目と、日本人を中心とするいわゆる正規学生向けの教養科目および専門科目の共同開講が教務上制約されるなど、学務制度的な問題を抱える大学も多い。結果的に受講しても単位が認められない学生がいる状況では、受講率やモチベーションに学生間で偏りが生じてしまい、特にグループワークが授業の要となる共修では、これが致命的な障害となる。日本人学生・留学生双方が同等に学習に対するコミットメントを単位取得という形で評価される環境が整わなければ共修は成り立たない。

4. 国際共修の事例

日本国内で実践されている国際共修の授業にはさまざまなテーマや学習形態を取り入れているものがあるが、筆者が所属する東北大学でも30科目以上の共修科目を全学教育科目（2単位）として開講している。それらをタイプ別に分けたものが以下となる。

| 授業の目的 | 概要 | 指導言語 |
|------------|---|-----------|
| 多文化理解 | 異なる文化背景を持つ学生同士が討論、グループワークを通して相互理解を促進する。 | 日本語 英語 |
| 日本文化学習 | 日本の伝統文化、現代文化、企業文化など、留学生にとっては異文化、日本人学生にとっては自文化への理解を深める。 | 日本語 英語 |
| テーマ別学習 | 国際時事、人権教育、コミュニケーション、クリティカルシンキングなどのテーマを基軸としたグループ討論、プロジェクトを行う。 | 日本語 英語 |
| 地域・産業界との連携 | 地域社会への貢献、地元企業との協働を授業に取り入れ、知識の享受者から情報発信や提案の出来るグローバルシティズンとしての視座を養う。 | 日本語 |
| 協働プロジェクト型 | 成果を意識した異文化間協働プロジェクトを実施する中で言語・文化背景の異なる学生同士が切磋琢磨し相互理解を図る。 | 日本語 英語 |

この中から筆者が担当する留学生と日本人学生との協働プロジェクト型の国際共修授業の実践例と教育効果の検証を一部紹介する。

(1) 授業の目的

課題解決型学習(PBL)を取り入れた「キャンパス国際化への貢献:異文化間協働プロジェクト」を、前期は日本語で後期は英語で開講している。授業の目的は、学習者が大学や社会などのコミュニティに貢献するという一定の「成果」を意識し、文化背景の異なるチームメンバーと協働作業を行いながらチームワーク、リーダーシップ、自発性、多角的な視点で事象を捉える力を習得し、異文化理解を通して自文化を見直し新たな価値観をつくりあげていくこと、である。

協働プロジェクトのクラスでは、初回のオリエンテーションで、上記の授業目標に加え、「東北大学の国際化に貢献すること」と、プロジェクトを企画・実施するうえでの留意点、「新地平を開拓するクリエイターであることを忘れず、二番煎じではない新しい企画を提案すること」、「言語・文化背景の異なるチームで協力する体制を構築すること」の3点を確認する。

(2) 授業の概要

前期の授業は、日本人学生は学部1年生と全留学生、後期は全学生を対象とし、全学教育、交換留学プログラム科目、日本語特別課程クラスの乗り入れで実施している。指導主言語に関わらず、特に学期始めの適応期や課題等の重要事項については日英両語を用い、学生間で受け取る情報に格差が出ないように心掛けている。授業は全て学生主体のプロジェクト・ベースで行う。最初の2~3回の授業で、クラス全員でブレインストーミングを行い、学生の関心に合わせたプロジェクトを立ち上げる。その後、チーム分けを行いプロジェクト単位の活動が始まる。留学生、日本人学生それぞれ3~4名ずつで構成されたチームが毎学期5~8つ立ち上がる。リーダー、サブリーダーは必ずどちらかが留学生であることとし、その他の書記、広報担当、会計係などのチーム内の役割分担もどちらかに作業の負担が集中しないよう予め調整する。日本語が指導言語の場合は日本人学生が、英語の場合は留学生が主導権を握る傾向にあるためだ。その他にも、チーム内での共有の方法、言語・文化背景の異なる者同士のコミュニケーションにおける配慮などを含む「うちのルール」作りをしながらチーム・ビルディングを行う。

各チームは、4回目の授業で行う「企画発表会」までにプロジェクトの目標、概要、対象、行動計画、予算案、期待される効果について議論を重ね、企画の草案を作る。企画発表会ではパワーポイントなどの発表資料を作成し自分たちの計画を他のチームにプレゼンテーションする。学部1年の日本人学生やアジア圏の留学生の半数は、発表資料の作成や人前での発表未体験者であるためここで第一の洗礼を受ける。チームメートに教わりながらIT・パブリックスピーキングスキルを身に着けるようだ。企画発表会で寄せられたフィードバックをもとに企画案を修正し、最終的に筆者に提出する企画書にゴーサインが出れば、本格的にプロジェクトに着手する。プロジェクトを進める中で、各チームが互いに共有できる情報やリソースを模索する「情報交換会」、プロジェクトの進捗状況を情報発信する「中間報告会」、企画から実施までの過程とプロジェクトの成果を振り返る「最終報告会」など、自分たちが責任をもって取り組むプロジェクトについて、他者に分かりやすく伝えるアウトプットの機会を定期的に設ける。また、これらのチーム単位の情報発信だけでなく、1学期間に3回提出する個

人報告書の中で、学生は各自、プロジェクトの進捗状況、自身のプロジェクトへの貢献、直面した課題とそれらをどのように乗り越えたか、今後の行動計画や意気込みを自分の言葉で発信する。

クラス全体で行う報告会等以外は、ほぼ全てがチーム単位での活動となる。企画立案やプロジェクトを進行する中で、言語や文化のみならず、価値観やワークスタイルの違いが原因とみられるぎくしゃくや衝突を繰り返す。日本人学生は留学生の独創性や行動力に感嘆し、同時に無計画さや時間管理のアウトさに戸惑う。留学生は意見やアイデアを出さない日本人学生に落胆し、しかし一度チームで決めたことは緻密な計画をもとに最後までやり通す勤勉さ、忍耐力、責任感を高く評価する。互いを理解し協力しなければ、最終目標である「プロジェクトの成功」にたどり着けないことに気づく学生らは、不安や不満を抱えつつも次第に相互理解を深め、友情関係を築き、「協働」へと舵を切り始める。最終的にプロジェクトを成功に導くのはチームの団結であり、また困難を乗り越えるために学生が自発的に踏み出す一歩である。

(3) 教育介入

プロジェクトの立案、実施は各チームに任せ、筆者は必要な助言・支援を行いながらファシリテーターに徹する。学生やチームが直面する問題はそれぞれ時期や深刻度も異なるため、授業中は、各チームを渡り歩き、進捗状況を確認しながら、質問形式の介入を行う。「なぜその方法を選ぶのか?」、「うまくいかないと思う理由は?」、「次に何をするのか?」など、質問を繰り返すことで、学生に自分で考える習慣をつけさせる。「これは〇〇した方がいいですか」と聞かれ、危うく即答しそうになるときもあるが、言葉を飲み込み、「あなたはどう思うの?」と問い返す。過度な助言や援助は禁物で、軌道修正可能な範囲であれば敢えて挫折を経験させる。自ら失敗しなければ納得せず、先に進めない学生が多いためだ。通常の授業に比べはるかに労力を要するが、このプロジェクトの進行状況や学生の学びに合わせた教育介入が共修の教育効果を大きく左右するため、十分注意を払いながら指導にあたる。

多い時は70名以上の学生が履修するため、一人ではとても全てのプロジェクトの進行や学生・チームの躓きに目が行き届かない。そこで各チームに「先輩アドバイザー」を一人ずつ配置している。このアドバイザーの多くは授業履修経験者で、授業の概要や進行について、また学生が直面する問題や解決策についてもある程度予備知識がある。プロジェクトに取り組む後輩らを、つかず離れず支えながら、プロジェクトを成功へと導く縁の下の力持ちに徹するよう、アドバイザーとも定期的にミーティングを重ねながら、学生の成長を見守る。

(4) 学習評価

協働プロジェクト形式の授業で最も難しい評価についても試行錯誤を重ねてきた。プロジェクトへの貢献、個人の意識変化に見られる学び・成長、行動の変化に表れる各種スキルの向上の三つの観点で評価している。しかし、個人の能力やプロジェクトに対する姿勢で学生の貢献度は異なり、また平均して自己評価の高い留学生と控えめな日本人学生、自己表現力の高い文科系学生と作文が苦手な理

系学部の学生が混在する中、チーム単位の発表や個人報告書だけではなかなか学生の進化が把握できない。履修者が多いとなおさらである。そこで、アドバイザーから定期的にそれぞれのチームでの学生の活動状況を聞きとり、チーム・メンバー同士のピア評価を取り入れながら、なるべく複眼的に学生の成長を評価するようにしている。

(5) 授業の成果

プロジェクトを行う中で学生は何度も問題にぶつかり、その度に試行錯誤し、困難を乗り越えるのだが、授業さながら、この科目を担当するのは授業実践者の筆者自身にとってもPBLの連続である。授業開始時の7年前はまだ教育の国際化がそれほど進んでおらず、学内でこのような異質な授業を行うことに対してなかなか理解が得られなかった。そのため苦勞続きで、何度も次年度の開講を断念しそうになった。しかし、たった一学期間で飛躍的に成長する学生を目の当たりにすると、教育者として共修に背を向けるわけには行かず、学内外の理解者、協力者を徐々に増やしながらかつてきた。授業に少しずつ改善を加え、ようやく形は出来てきたが、まだ満足できる体制とは言えない。これが国際共修の難しいところであり、教授法の確立を急ぐゆえんである。

ここに紹介する協働プロジェクト型の国際共修では、数々のユニークなプロジェクトが東北大学の国際化に貢献してきた。留学生がホームシックにならないように、仙台市内の外国料理店や食材店を丁寧に取材し地図形式で紹介したパンフレット作り、世界のダンス教室開催、生協との共同企画によるエスニック弁当の企画・調理・販売、漫画で文化の違いを紹介した冊子制作、市民向け国際料理教室の開催、老人ホームでの文化紹介、被災地での国際色豊かな炊き出し、留学生のための部活・サークル体験ツアーの企画とガイドブック作り、震災後に減少した留学生を呼び戻すための仙台PRビデオ作り、日替わりで各国の文化を紹介するインターナショナルウィーク等、数多くのプロジェクトが誕生した。

共同学習にとどまらず、実社会に何らかの形をもって貢献することを授業の目標に据えているので、成果の活用、情報発信も積極的に行っている。例えば上記のレストラン・食材店を紹介したパンフレットや部活・サークルガイドブックは、新入留学生オリエンテーションで配付し、また小学生を対象としたお菓子作り教室の案内は仙台市内の小学校に案内を出す。この成果の実用化と見える化は学生のモチベーションの向上のみならず、学内外での共修活動のプレゼンスの拡大にもつながる。国際共修の理解者、協力者が徐々に増えている一因はここにあるのではないか。

5. 国際共修の教育効果

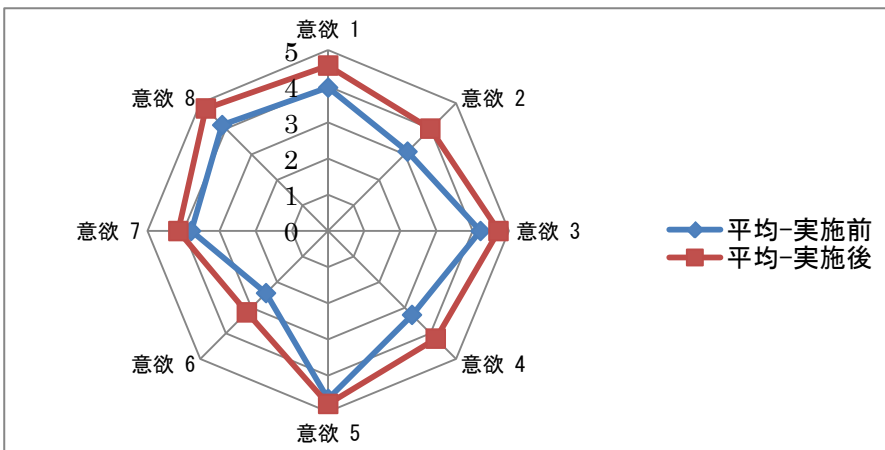
国際共修が学生の学びに与える影響についてはこれまで様々な方法で検証してきた。PBL型の国際共修が、日本人学生の異文化および自文化理解の促進につながることはすでに報告しているとおりだが(末松・阿藪、2008)、昨年度から今年度にかけて実施し、現在分析を進めている調査でも共修の効果が明らかになっている。

(1) コンピテンシーの変化

昨年、日本人の履修者を対象に行った授業前と授業後のアンケート調査では、学生の①異文化交流に対する意欲、②柔軟性、③感情の自己管理、④不確定なことに対する忍耐力、⑤自己効力、⑥異文化の許容、の各項目において、学生のコンピテンシー自己評価に着目した。各項目はそれぞれ8～12の質問で構成され、5件法¹を用いて学生のコンピテンシーの変化を測っている。各項目、質問ごとにばらつきはあるが、全ての項目において学生の自己評価平均値が上昇する結果となった。以下、一例を紹介しよう。

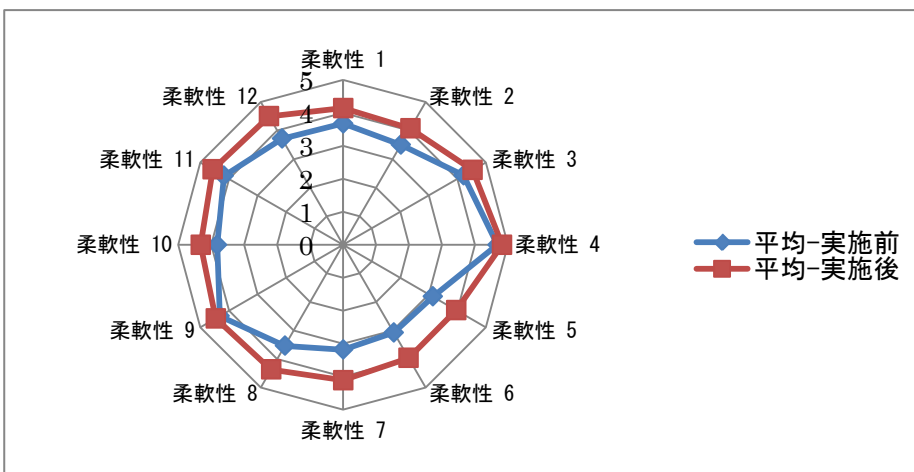
異文化交流に対する意欲（8つの質問で構成）

<意欲質問4：自分があまりなじみのない文化であっても異文化体験を楽しむ方だ>



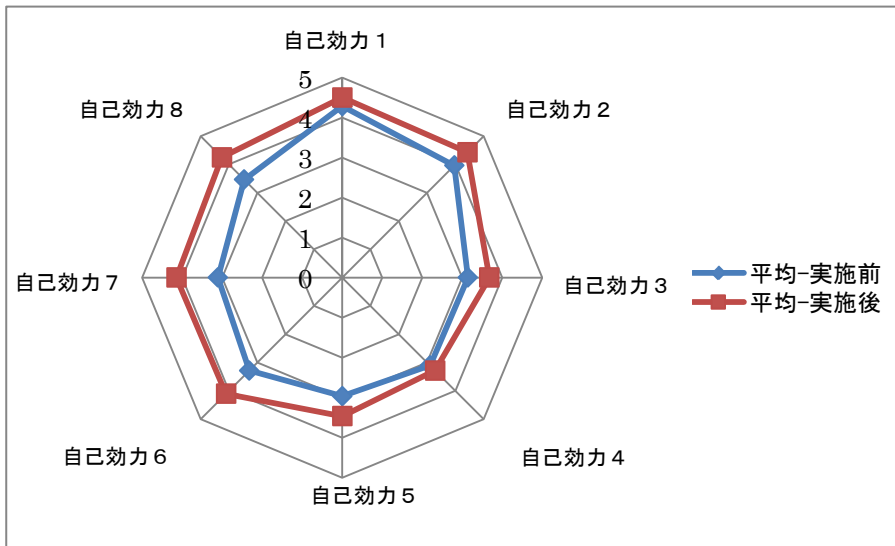
柔軟性（12の質問で構成）

<柔軟性質問6：問題に直面しているとき、常にいくつかの解決策が頭に浮かぶ>



自己効力（8つの質問で構成）

<自己効力質問7：文化背景の違う人とも問題なく交流できる自信がある>



今年度の授業履修者（日本人・留学生）を対象に行った調査では、上記の項目に「コミュニケーション」、「行動力」を新たに加えた。この調査では、「コミュニケーション」、「柔軟性」、「自己効力」、「行動力」の項目で特に顕著な変化が見られている。

興味深いのは、授業前と比べ、「コミュニケーション」、「異文化許容力」、「不確定なことに対する忍耐力」の項目で自己評価を下げた日本人学生が散見される点である。これらの自己評価の変化を自由記述の欄に「自分の能力を過大評価していた。言語・文化背景の異なる学生との協働作業は想像以上に難しく自分にはまだまだ協働プロジェクトを円滑にこなせる能力が備わっていないことが分かった」と記述した学生は、「これからの大学生活でどのような能力を身につけなければならないか明確になった。留学生と積極的に関わり新しいことにチャレンジしてゆきたい」と自己の能力の欠如を新たな目標設定に転換させている。このような気づきこそが成長であり、特に日本人学生にとっては、居心地の悪い環境であっても敢えて飛び込み、新たな経験や人間関係の構築に向き合う自信がついたという点で共修が果たした役割は大きいといえる。

（2）学習成果報告書

プロジェクトと成果発表会を終え、一学期間の学習を振り返る報告書からも学生の成長が伺える。以下、日本人学生と留学生の学びを、語学・コミュニケーションと異文化理解に分けて一部紹介したい。

語学・コミュニケーション

◇日本人学生

- ・ 留学生が話す英語はリスニングの教材と全く異なり自分ではそれなりに自信があった読解力や文法も役に立たなかった。しかし慣れるものでだんだん理解出来るようになり意思疎通が図れるようになった。
- ・ 日本語でうまく伝わらなかったのが英語に切り替えたが通じない。自分の語学力が情けなく辛い時もあったが、その何倍もコミュニケーションが取れた時の喜びは大きかった。絵を描いたり簡単な

単語をつなぎ合わしたりしてお互い努力を重ね会話を楽しめるようになった。当たり前ではあるが正確に話すことではなく伝えようと努力することが大切だと実感した。

- ・ 留学生は自分の率直な意見をどんどんぶつけてくるため、自分もいつしか単刀直入に応じるようになりそれが効果的なコミュニケーションにつながるということが分かった。

◇留学生

- ・ 教科書で習った日本語で話す日本人学生はほとんどおらず驚いた。最初は聞き取れず苦労したが何度か困った顔をしたら分かりやすく言い直してくれた。今ではかなり理解出来るようになった。
- ・ 自分の日本語が通じないことが何度かあったので、言い方を変えたり何度も繰り返すなど工夫するようになった。そうすると次第に伝わるようになった。
- ・ 日本人は人が話しているときはその人の意見に同意しなくても話し終わるまで聞き、後で礼儀正しく反論を述べる。日本的なコミュニケーション方法を学ぶことが出来た。
- ・ 最初は日本に来たばかりで日本語が上手く話せず共通の話題もないのでチームに馴染めなかった。しかし日本人メンバーがそれに気づいて英語を交えながら話しかけるなど配慮してくれるようになった。徐々に日本語で会話ができるようになり最後は何でも話せる友達になれた。

異文化理解

◇日本人学生

- ・ 言葉や文化が違うだけで住む世界が違うように感じていたので最初は恐怖を抱いていた。しかし相手を理解しようと努力したりジョークを連発したりして場を和ませる留学生に助けられ自分の思い込みが払拭された。
- ・ 自分の中で「当然こうである」と思っていることでも文化や価値観の相違がもとで起こる前提理解の違いがあるため、あえて一つ一つ言葉にする必要があり、その中で自分が改めて気付かされることが多々あった。
- ・ 全く違う視点の発想が次々と出てくるので目からうろこの連続だった。もっと文化背景の異なる人と関わりたいと思うようになった。
- ・ 最初は壁を感じたが今では殆ど感じない。言葉も重要だが何よりも自分の意見を持っていることが大切で、自らの考えを示せば留学生は関心を持ち会話が始まる。自分にとって大きな発見だった。
- ・ 考え過ぎずまず行動してみるという日本人にはなかなかできないことを留学生が当たり前のようにしていた。また失敗しても飄々としている。次第に自分も見習いたいと思うようになった。
- ・ 最初は何をしていいかわからず不安だらけだったが留学生と授業内だけでなく授業外でもプロジェクトの準備で会うようになり、食事をしたりトランプをしたりしながら距離が縮まっていくのが楽しかった。この授業を取って留学したいという気持ちがさらに強くなった。
- ・ 文化は違えど同じような年で同じように学生生活を送ってきているので思ったよりも考え方が似ていると感じることがあった。

◇留学生

- ・ 日本人はいいアイデアをたくさん持っているがなかなかアウトプットしないのもったいないと思った。アイデアを引き出すにはこちらから働きかけなければならないことが分かった。
- ・ 日本人学生は最初から最後まで大変な仕事でも嫌な顔をせず請け負うのですごいと思った。またチームのことを第一に考える。日本人の資質を知るいい機会になった。
- ・ 日本人の学生は責任感があるということが分かった。プロジェクトを成功させるために自分に与えられた役割以上のことをするし、彼らの姿勢から学ぶことは多く次第に尊敬するようになった。
- ・ 自分はムスリムでプロジェクトの「子ども向け料理教室」の準備期間中にラマダンがあり大変だったが、チームメンバーが次第に理解を示してくれるようになり、その彼らの変化や配慮に感動した。
- ・ あまり文化の壁を感じなかった。日本人学生は恥ずかしがりやだがいいアイデアを持っているし、国が同じでも働き者と人任せ気味な人がいる。ただ国籍の違う人たちと一緒に仕事をしている、という認識しかないくらい自然に活動できた。
- ・ 欧米出身者と働くのはこんな感じかということが理解出来たし、将来、様々な文化背景を持つ人と働くことになると思うのでいい経験になった。
- ・ 自分はヨーロッパ出身なので多文化の環境にはある程度馴染みがあるが、文化の違うメンバーで力を合わせて働くという経験は初めてだったので授業から学ぶことは多かった。

(一部筆者が和訳、文法上の誤りを修正)

これらの学生の学びからも分かるように、共修は日本人学生と留学生の双方にとって言語やコミュニケーションの向上のみならず、異文化理解を深める有効な手段となっている。また日本人学生、留学生という二極分類ではなく、例えばアジア出身者が欧米出身者との協働で得る気づきなどの留学生間の異文化学習も存在する。さらに、差ではなく共通点を見出したり、国単位の文化ではなく個人の文化の差に言及する学生もおり、共修現場がダイナミックな多文化学習の場にもなり得ることが分かる。このような環境下で、学生らはグローバル人材に必要とされる異文化コンピテンシーを自然に身に着ける。異文化経験の浅い日本人学生と既に日本に留学し異文化適応を経験している留学生の意識、行動、コンピテンシーの変化を同じ尺度で測ることは難しいため、現在、定性的な効果検証を進めているが、検証結果を国際共修授業や異文化間教育実践のさらなる改善につなげる Theory into Practice を引き続き試みたい。

5. 国際共修の展望

先述したように、日本における国際共修授業はまだ歴史も浅く、体系だった教授法が確立されているとは言い難い。多文化教育の進んだ欧米諸国だけでなく、近年は高等教育の国際化先進国であるシンガポールや韓国でも留学生と現地学生による共修の教育効果が注目されてきている。留学生 30 万人計画や派遣留学の倍増計画で学生のモビリティが上がり、各高等教育機関の学生構成員の多様化が今後ますます進む日本でも、グローバル教育の要となる国際共修のグッドプラクティスを集約したり、

効果検証を多層的な視点で行うなどして教授法の確立を急ぐ必要がある。Barrett et. al (2014)は、異文化コンピテンシーの向上を目的とした正課・正課外教育はグローバル・シティズン（地球市民）教育の基盤であり、異文化教育科目にとどまらずあらゆる教育実践に導入されるべきだと説いている。日本が真の共生社会として発展するためには、まずはグローバル化が加速的に進む高等教育の現場で共修を活用した国際教育を広め、「異」の受容と「自」の再考を新たな価値創造へとつなげる教育実践の重要性を積極的に社会に情報発信する必要がある。国際共修の教授法の確立が共生社会実現の一助となることを願ってやまない。

参考文献

Barrett, Marty; Byram Michael; Lázár, Ildikò; Mempoigt-Gaillard, Pascale; and Philippou, Stavroula (2014) *Developing Intercultural Competence through Education*. Strasbourg: Pestalozzi Series No. 3, Council of Europe Publishing

加賀美常美代（1999）「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」、日本コミュニティ心理学会、『コミュニティ心理学研究』、第2巻第2号、131-142

加賀美常美代（2006）「教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか—シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、24、アカデミア出版会、76-91

Leask, Betty (2009) Using Formal and Informal Curricula to Improve Interactions Between Home and International Students, *Journal of Studies in International Education*, vol.13, no.2, 205-221

中野はるみ（2006）「異文化教育における留学生の役割」、『長崎国際大学論叢』、第6巻、55-64.

末松和子、阿諾娜（2008）「異文化間協働プロジェクトにみられる教育効果」、異文化間教育学会編、『異文化間教育』、28、アカデミア出版会、114-121

徳井厚子（1999）「多文化クラスと創造性—学生による討論形態の模索か」、『信州大学教育システム研究開発センター紀要』、第5号 18-23

坪井健（1994）国際化時代の日本の学生、学文社

¹ 質問紙調査で5つの選択肢を使用する方法。